

# 教育実践報告

## 知的障害教育における体育科年間指導計画に関する実態調査

－特別支援学校6校の小学部体育科年間指導計画の調査－

松見 育子 山元 薫

(静岡大学教職大学院 静岡大学教育学部)

## Fact-finding Survey on Annual Teaching Plans for Physical Education in Education for Intellectual Disabilities

Investigation of annual Teaching Plans for Elementary School Physical Education

at Six Special Needs School

Ikuko MATSUMI Kaoru YAMAMOTO

### 要旨

現行の学習指導要領では、小中学校をはじめ特別支援学校でもカリキュラム・マネジメントの推進が求められている。知的障害教育においても、評価規準を設定した学習評価が必要となり、従前にくらべ、一層の学習指導要領の内容の理解と教科の本質的な内容の理解、障害特性を踏まえた独自の年間指導計画の必要性が高まってきている。そこで、本研究では、県内の特別支援学校6校を対象として、小学部体育科年間指導計画を収集し、その記載内容について検討することを目的として調査を行った。

本調査から、調査対象校6校全てで、時期、単元名、単元目標の記載はあるものの、資質・能力の柱となる3観点での目標の記載や指導事項、評価規準の記載はなかった。同様に、小学部の6年間で体育の教科として、各学年、月ごとに扱う領域と活動内容が記載されているだけで、知的障害児特有の運動発達上の課題に迫る目標や内容を具体化することのできる系統性を示している学校はなかった。一人一人の障害の状態や発達段階が様々である児童に対応し、目標や内容を細かく設定する根拠になりうる内容の年間指導計画はなかった。そこで、今後体育の教科における目標や内容、各運動領域の系統性をさらに細分化し、障害の状態や発達段階に応じた目標と内容が順序性や系統性に基づいて整理する必要がある。そして年間指導計画と併せて、順序性や系統性を細分化して構成された補助資料を活用していくことで、体育科のカリキュラム・マネジメントを実現可能にし、学習内容や指導の改善につながっていくだろうと考える。

キーワード： 年間指導計画 カリキュラム・マネジメント 体育科 知的障害

### I. 問題の所在

#### (1) 知的障害教育における体育の目標と内容の理解の困難性

現行の学習指導要領では、子供たちの姿や地域の実情を踏まえて、各学校が設定する学校教育目標を実現するために、学習指導要領に基づき教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していく「カリキュラム・マネジメント」の実現が求められている（文部科学省、2016）。

各学校においては、特色ある学校づくりを目指して教育課程を編成する。その中核が各教科の授業計画である。中でも体育は、地域社会の特性を生かすことや、学校行事、体育施設さらには四季などを考慮しながら年間指導計画が作成されると（杵子・家田・勝亦、2020）は述べている。また、白旗（2012）は、一人の教師が担当する1年間だけの指導を考えるのではなく、小学校6年間を見通して、学校全体で指導計画を立てることが大切であり、特に体育は、他教科以上に地域や学

校の実態（気候や校庭の広さ、施設や用具なども）及び子どもの心身の発達の段階や特性、そして児童数にも影響しやすいのでこれらを十分に配慮する必要があると述べている。さらに、子どもの発達の段階や指導の系統性を踏まえ、当該学年ではどのような内容を指導し、何を身につけるのかを明確にする必要があると述べている。現行の学習指導要領に改訂されてから5年が経過し、阿部（2022）は、「特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）（平成30年3月）」の充実ぶりには目を見張るものがある。巻末には「目標・内容の一覧」が各教科別に示されており、学習内容表として準用できそうな出来栄である。これらの活用も大切になってくるだろうとしている。

特別支援学校の学習指導要領には学年ではなく、段階別に指導内容を示している。その理由は、発達期における知的機能の障害が、同一学年であっても、個人差が大きく、学力や学習状況も異なるからである。そのため、段階を設けて示すことにより、個々の児童生

徒の実態に即して、各教科の内容を精選して、効果的な指導ができるようにしている（文部科学省, 2018）。

しかしながら、表1に示したように、例えば、B 器械・器具を使つての運動遊び（1段階）の目標・内容を見て、器械運動系の領域で何を、どのように学ばせるかを読み取ることは困難である。

表1 特別支援学校学習指導要領解説各教科等編  
小学部・中学部 目標・内容の一覧【体育】（抜粋）

小学部【体育】1段階
ア 教師と一緒に、器械・器具を使つて楽しく体をうごかすこと。
イ 器械・器具を使つて体を動かすことの楽しさや心地よさを表現すること。
ウ 簡単な合図や指示に従つて、器械・器具を使つての遊びをしようとする事。

器械運動系の領域では、固定施設を使った運動・マット運動・鉄棒運動・跳び箱運動があり、それぞれの種目に対して系・技群・グループとその内容は多岐にわたる。とりわけ、特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）（2018）（以下、各教科等編解説とする）の体育科の各段階の目標及び内容や、各段階の内容に書かれている例示を見ても、体育の授業づくりを行う教員が何をどのように学ばせるのかをイメージすることは困難である。

特別支援教育における体育について、勝二（2012）は、特別支援学校の「体育」の授業では単元内容をこなしていくことが目的となつてしまい、個々の子どもの運動発達に明確な目標が立てられず、年間活動を通しての系統的な支援を展開することを困難にしていると思われると述べている。このことは、個々の障害特性や発達段階を考慮し、明確な目標を基にした学習内容が考えられないまま、授業をこなしていくという傾向にあり、きめ細かな対応に至っていないと言える。

このように、知的障害教育における体育の目標と内容の理解については、多くの情報を整理した上で、障害のある子供一人一人の教育的ニーズに対応した適切な指導や必要な支援を考えていかなければならないので困難性が高いと考えられる。

## （2）知的障害教育体育科の指導計画と学習評価

体育の目標を達成するために、授業は意図的・計画的にしかも組織的に構築されなければならない。その基点となるのが年間指導計画であると李子ら（2020）は述べているように、指導計画は授業づくりを行うために重要な役割を果たしている。

各教科等編解説の「小学部における指導計画の作成と各教科全体にわたる内容の取扱い」では、小学部の児童は、知的障害の状態、入学前の生活経験の内容や経験の程度、興味や関心、対人関係の広がりや適応の状態等が一人一人異なっている。そこで、指導計画の作成に当たっては、これらを考慮しながら、一人一人

の児童の知的障害の状態や生活年齢、学習状況、経験等に応じて、6年間を見通した全体的な指導計画に基づき、各教科に示された指導目標や指導内容を選定することが重要であると述べられている。

また現行の学習指導要領には新たに、児童の自立と社会参加に向けて、小学部6年間を見通しながら、小学部段階での学習を通して育成を目指す資質・能力を整理し、適宜、学習状況の評価を行いながら、繰り返し経験することで学習の定着を図ったり、経験の拡大を図ったりしていくことなど、計画・実施・評価・改善のサイクルを踏まえて指導計画を適宜修正・加筆し、指導していくことが重要であると示された。

知的障害教育においては、以前から、児童生徒の学習過程を重視し、興味・関心や取り組み意欲を重視した包括的な評価が行われてきている。さらに、「思考・判断・表現」などの観点からも、その学習過程を分析的に評価することにより、児童生徒が身に付けている力を基にして、「どのようなことができる可能性があるのか」、「どのような課題が解決できるのか」などの、もてる力やその可能性がより明確になると考えられる。今後、学習過程を含めて学習評価できる指導計画や授業構成の工夫がより一層重要になると国立特別支援教育総合研究所（2015）は述べている。

三浦・山口・小倉（2022）は、カリキュラム・マネジメントのねらいは、児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、編成した教育課程に基づき組織的かつ計画的に授業の質の向上を図ることであると述べている。授業の質の向上を図ることについては、「学習評価の在り方ハンドブック」（国立教育政策研究所教育課程研究センター、2020）の中にも、「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹であり、教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割を担っていると示している。

このように、「学習指導」と「学習評価」が教育活動の軸となりカリキュラム・マネジメントを展開していくためには、学校の教育活動に欠かすことのできない年間指導計画と、特別支援教育には欠かすことのできない個別の教育支援計画、個別の指導計画、自立活動の個別の指導計画（以下個別の3計画）の活用がより一層大事になると考える。

## （3）研究の目的

カリキュラム・マネジメントの実現が求められている今、特別支援教育においてカリキュラム編成を行っていくためには、児童や学校の実態に応じた指導目標や指導内容が選定され、内容を精選した指導を行い、学習指導と学習評価を可能とし、教育課程の改善・充実を図るというPDCAサイクルを確立することが重要である。そのためには、学校の教育活動の基点となる年間指導計画は重要な役割を果たしていると考えられる。

そこで、本研究では、静岡県内の特別支援教育における小学部体育科の年間指導計画を調査し、現状を概観することで、各校の年間指導計画がカリキュラム・マネジメントに対応しているものであるのか、①単元(題材)の配列②扱う領域について③単元(題材)の特徴の3つの視点で明らかにするとともに、今後、知的障害特別支援学校での体育科で必要となる課題も明らかにしていきたい。

## II. 方法

### (1) 調査対象

- ①静岡県内の知的障害特別支援学校  
 知的障害単独校3校(C校,D校,F校)  
 知的障害・肢体不自由併設校3校(A校,B校,E校)  
 合計6校を抽出した(表2)。

### ②収集内容

小学部体育科の年間指導計画。

### (2) 手続き

#### ①回収期間

2022年7月～8月まで。

#### ②依頼手続き

筆者所属の校長から対象校校長に情報提供を打診し、承諾が得られた学校に提出を依頼した。

#### ③回収状況

回収された学校は6校(回収状況100%)。

表2 調査対象校の内訳

	A校	B校	C校	D校	E校	F校
知的特別支援学校			●	●		●
知的・肢体併設校	●	●			●	
小学部知的児童数 (小学部肢体児童数)	84名 (27名)	113名 (24名)	131名	94名	132名 (27名)	82名
体育授業時数	1年	133	31	117	102	111
	2年	136	36	118	110	140
	3年	137	140	118	108	174
	4年	137	134	114	110	190
	5年	135	165	113	128	198
	6年	135	139	105	131	202
6年間の合計授業時数	813	645	685	689	1015	720

※小数点以下切り捨て

## III. 結果

### (1) 年間指導計画の構成(6校)

年間指導計画には様々な様式があるが、そこに含まれる基本的な構成要素としては、単元名、単元(題材)目標、各単元における主な学習活動、指導事項の有無、活動時期、予定される時数、活動場所などがある。調査対象校の年間指導計画の内容をしてみると、表3のようになる。

単元名は、体育科の内容であることから、単元名(題材名)と運動領域が名称に混ざった形で記載されていた。例えば、「マットで遊ぼう」や「ゴールに入れよう」等どんな活動を行うのか、児童が聞いて分かりやすい単元名にすることで、これから行う活動が分かるようになっている。この他に「サーキット」や「ボール運動(上肢)」等この単元で授業を行う授業者が見

た時にどの領域でどのような活動を扱えば良いのかが大よそ分かる表記となっているものが全体の半分近く見られた。

単元(題材)目標は、表4に示したように、知識・技能に重点を置いた表記となっており、3観点のうち思考・判断・表現や主体的に取り組む姿に対する目標の表記は少なかった。

単元(題材)として扱う内容から「～動かす(走る、蹴る、投げる)ことができる」や「友達と一緒に○○に取り組んだりすることができる」のように、指導目標が単元(題材)の特徴を踏まえた活動の目標として示されている。学習活動の具体が示されていないものでも、単元(題材)目標の文面を読むことでその単元で扱う内容がどのようなものか、分かる目標になっているものもある。6校中C校は題材目標に加えて評価規準を設け、観点別の評価規準を示しているものもあった。

各単元(題材)における学習活動は、記載されている学校はD校,E校,F校、記載のない学校はA校,B校,C校であり、学習活動が分かる表記は半分だった。扱う単元(題材)において昨年度行った既習学習についての記載がされていた。記載されている学校では、例えば「ボール転がし」や「リトミック運動」など、単元内で行う活動の記載がされていた。

指導事項の有無については、指導事項としての項立てはなかった。題材目標と併せて評価規準として明記し、記載している学校はC校のみだった。だが、C校の思考力、判断力、表現力等については、学習指導要領の解釈と多少ずれるものがあった。他5校は指導事項について記載が無く不十分であった。

活動時期については、総じて4月から始まり3月の年度末まで、一年間を全体像として見通すことができる一覧表の形式だった。何月にどの単元(題材)を扱うのかが一目でわかる形となっている。

予定される授業時数については、A校,B校のみ記載がされていたが、両校とも記載漏れの箇所もあり不十分だった。F校は、週における時間数が記載されていた

表3 各学校における年間指導計画の内容

	A校	B校	C校	D校	E校	F校
単元名	○	○	×	×	×	○
領域内容	一部記載 (単元名と領域が混同)	○	×	一部記載 (単元名と領域が混同)	×	○
単元目標(題材)	△ ・活動のねらいと内容の目標が混ざっている。	×	○	△ ・活動のねらいと内容の目標が混ざっている。	×	○
学習活動内容	×	△	×	○	○	○
時数	△	△	×	×	×	○ (週あたり)
場所	○	×	×	○	×	○

表4 各単元における目標の観点別評価 表記の割合

目標（観点）	A校		B校		C校		D校		E校		F校	
	器械運動系	ボール運動系										
	鉄棒	ボール運動（下肢）										
知識及び技能	100%	50%	100%	50%	25%	40%	100%	50%	0%	50%	100%	0%
思考・判断・表現	0%	50%	0%	50%	25%	30%	0%	25%	0%	25%	0%	50%
主体的に学習に取り組む態度	0%	0%	0%	0%	50%	30%	0%	25%	0%	25%	0%	50%

たが単元ごとに扱う時数の表記はされていなかった。それ以外の学校には時数の表記がされていなかった。

活動場所については、A校、D校、F校に記載があった。特別支援学校には同じ施設内に小学部、中学部、高等部があり、3つの学部、12学年がそれぞれの体育の教育課程を編成している。例えば9時から11時までの時間を小学部6学年で割り振るなど、学校独自の工夫を凝らし、限られた時間と場所で授業展開していることから、物理的に、適時適切にどの学年も場所を確保することが難しい状況にあり、体育の学習活動と活動時間が十分に確保できない状況にある。

### （2）学年で扱う領域の特徴

各学年における年間で扱う運動領域（内容）は表5の通りである。

特別支援学校学習指導要領に示された運動領域以外に扱う内容は、どの学校においても5つ内容（ラジオ体操、集団行動、集団種目練習、新体力テスト、ニュースポーツ）が共通で扱われていた。

A 体づくり運動系の領域としての「体づくり運動（遊び）」は、1年生で31%の割合を占め、年間通してみても3分の1の割合で多くの時間をこの体づくり運動（遊び）で扱っているのがわかる。2年生以降も約20%の割合でこの領域を扱い、6年間を通して体づくり運動系に十分時間を充てていることがわかる。

B 器械運動系の領域としての「器械・器具を使っての遊び（運動）」は、1、2年生が一番多く17%扱っている。体が小さく自分の体のコントロールがしやすい小学部低学年は、扱いやすい領域と言える。

C 陸上運動系の領域としての「走・跳の運動遊び（走・

跳の運動）」は、3年生が一番多く、19%扱っている。

D 水泳運動系の領域としての「水遊び（水の中での運動）」では、1年生の10%が一番多い。この領域については、近年のコロナ感染症の影響を大きく受けている。特に肢体不自由教育を併設している学校では、水泳指導を行わない、または高学年のみの取り扱いとなっている。

E ボール運動系の領域としての「ボール遊び（ボールを使った運動やゲーム）」は、高学年の6年生が21%と一番多く、次いで5年生が20%の扱いとなっている。

F 表現運動系の領域としての「表現遊び（運動）」は、2年が15%と一番多く扱っている。低学年ではリトミックとして教師や友達と一緒に音楽に合わせて楽しく体を動かしている。

G 保健領域は、各校とも単元の記載が不十分なところが多かった。1校のみ2年生に1年を通しての記載があったため13%の割合を示した。

各運動領域 A～F までの内容が、各学年で一年を通して配置されていた（コロナ感染症対策の影響でD水の中での運動が扱われていないところもあった）。扱う内容については、2学年をまたいで未実施になる運動領域がないように配列されていた。Gの保健領域については、記載のある学校とない学校があった。

### （3）月別でみた扱う領域の特徴

月別に扱う運動領域（内容）は、表6の通りである。

4月に多く扱われるのが体づくり運動遊び（運動）が一番多く27%で、次いで集団行動が22%、ラジオ体操が15%となっている。

5月になると集団種目練習が35%、走・跳の運動遊

表5 各学年における年間指導計画の領域比較

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
A（体づくり運動系）	31%	17%	21%	17%	22%	18%
B（器械運動系）	17%	17%	15%	13%	12%	11%
C（陸上運動系）	17%	17%	19%	16%	12%	14%
D（水泳運動系）	10%	8%	7%	6%	8%	8%
E（ボール運動系）	14%	16%	18%	15%	20%	21%
F（表現運動系）	7%	15%	7%	6%	7%	4%
G（保健）	0%	13%	0%	9%	3%	4%
ラジオ体操	0%	4%	4%	2%	3%	0%
集団行動	0%	0%	4%	5%	3%	5%
集団種目練習	3%	4%	3%	2%	7%	7%
新体力テスト	0%	0%	1%	1%	8%	8%
ニュースポーツ	0%	0%	1%	1%	1%	0%

表6 月別の領域比較

	4月	5月	6月	7月	8、9月	10月	11月	12月	1月	2、3月
A (体づくり運動系)	27%	10%	7%	13%	11%	18%	32%	33%	17%	33%
B (器械運動系)	2%	10%	30%	4%	27%	30%	22%	5%	10%	4%
C (陸上運動系)	14%	33%	5%	0%	0%	5%	19%	43%	36%	6%
D (水泳運動系)	0%	0%	19%	57%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
E (ボール運動系)	5%	2%	9%	9%	24%	27%	14%	15%	26%	39%
F (表現運動系)	12%	2%	7%	4%	18%	5%	8%	3%	2%	10%
G (保健)	2%	2%	7%	11%	9%	5%	3%	3%	7%	4%
ラジオ体操	15%	2%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	0%
集団行動	22%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
集団種目練習	0%	35%	2%	0%	11%	7%	0%	0%	0%	0%
新体力テスト	2%	4%	14%	0%	3%	5%	3%	0%	0%	0%
ニュースポーツ	0%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	2%	4%

び(運動)が33%と高い割合を示している。この時期に体育的行事を行っていることが多く、各学年集団種目と徒競走の2種目を基準とした発表を取り組みとしているからと考えられる。

6月になると器械運動系の領域が30%と高い割合を示す。次いで水泳運動系が19%で扱われている。水泳指導の雨天時対策として、器械運動が扱われている。また、新体力テストが14%扱われており、スポーツ庁が実施する「体力・運動能力調査」に合わせて、ここに位置付けられている学校が多い。

7月は水泳運動系が57%と圧倒的な割合で扱われている。また保健が11%と、年間を通してこの月が一番高い割合を示している。

8・9月は器械運動系が27%、ボール運動系が24%の割合で扱われている。この時期の表現運動系は18%で、年間を通してこの月が一番高い割合を示している。

10月も同じく器械運動系が30%、ボール運動系が24%で、8、9月と同じ領域が多く扱われている。

11月は体づくり運動系が32%、器械運動系が22%、扱われている。体づくり運動系ではサーキット運動、器械運動系では、鉄棒が多く扱われている。

12月は陸上運動系が43%で、持久系の種目が主に扱われている。体づくり運動系は33%と高い割合を示し、この時期の代表的な単元(題材)として縄跳びが挙げられる。

1月は陸上運動系が36%で、12月に引き続き持久系の種目である、周回走や時間走などが扱われている。

2、3月ではボール運動系が39%と圧倒的な高い割合で扱われ、その内容も下肢のボール運動で、とりわけサッカーを扱う単元が多くみられる。四季による気候、気温などのコンディションを加味しながら年間指導計画に配置されていることが分かる。

**(4) 各運動領域で扱う単元(題材)の特徴**

知的障害特別支援学校の年間指導計画に配列されている単元の構成について、各領域で扱われている単元の特徴は表7の通りである。

A 体づくり運動系の領域では、音楽に合わせてまねっこ遊びをしたり、曲に合わせた動きや動物の動きをしたりして、楽しく体を動かしながら歩く、走る、跳ぶ、這う、くぐる、またぐなど様々な動きを活動の中

に取り入れて行っている。また、知的障害教育に特徴的な内容として、押したり引いたり、持ち上げたり、手繰り寄せたりするなど、日常生活動作に必要な動きをこの運動領域で扱っているところもある。これまで経験したことのない動きを体育の活動として取り上げ、繰り返し行うことで、その他の運動領域の基礎・基盤となる様々な体の基本的な身体づくり・動きづくりを行っている。

B 器械運動系の領域では、マット運動、鉄棒、跳び箱、固定施設の遊びや運動を単体で行うことは少なく、組み合わせで活動に取り入れている。1つの種目ではなく複数の動きを組み合わせることで、限られた時間の中で多くの動きを経験することができる。また、実態幅も大きいことから場の設定を実態に合わせた難易度に変えられるという良さを生かし、知的障害特別支援学校の小学部では従前から多くの学校で行われている。

C 陸上運動系の領域では、徒競走(短距離走)、持久走(マラソン、周回走、時間走と言いは様々である)、簡単な障害物と走る運動を組み合わせた運動が主になる。徒競走では、低学年が30m、中学年が40m、高学年が50mの距離を走ることが多い。持久系の運動では、時間走か周回走かは各校の慣例によるところが多い。知的障害特別支援学校の体育活動場所の調整が困難な現状から周回走から時間走へ移行している学校もある。低学年では4分間の時間走や、音楽が流れている間走ったり、歩いたりし続ける、という設定がされている学校もある。中学年で約6~7分間、高学年が約5~9分間の時間走を行っている。周回走では、600m~1200mの設定となっている学校もあるが、学校によって距離は記載されておらず、個々の実態により距離を設定したり、学年の実態によって距離を設定したりしているところがある。簡単な障害物を越える活動と走る活動を組み合わせた運動では、障害物(ゴムまたぎやミニハードル)をいくつか設定し、走りながら周回するサーキット運動としての扱いが全ての学校で取り組まれている。

D 水泳運動系の領域では、低学年で、たらいやビニールプールに水を張って水かけっこや水遊び、道具を使った水遊び、浅いプールで水中リトミックや水に慣れる活動を行っている。中学年になるとプールで水に

表7 各運動領域で扱う単元(題材)の特徴

	A (体づくり運動系)	B (器械運動系)	C (陸上運動系)	D (水泳運動系)	E (ボール運動系)	F (表現運動系)	
単元名	「リトミック」	「力だめし」	「マットで遊ぼう」	「よういどん」	「プールでぼしゃぼしゃ」	「ボール運動(上肢)」	「レッツダンス」
	「なわとび」	「動物ウォーク」	「跳び箱、平均台」	「はしってはしって」	「プールを楽しもう」	「ボール運動(下肢)」	「ダンス」
	「サーキット運動」	「ストレッチ」	「めざせ体操選手」	「マラソン」	「プールですいすい」	「ゴールにシュート」	「ダンス体操」
	「みんなで歩こう」	「よいしょ、ひっぱれ」	「跳び箱びよん」	「持久走」	「水遊び」	「ねらって投げよう、 速くへなげよう」	「棒体操」
	「ボールをえいっ!」	「ペアになって、1,2,3」	「わたってのぼって、びよん」	「短距離走Om」	「水の中の運動」		「手ぬぐい体操」
	「おすもうごっこ」	「ジャンプ、ジャンプ」	「器械運動」	「ゴール目指して」	「水泳」	「ボール蹴りゲーム」	「リトミック」
動き (活動内容)	・音楽に合わせて手足を動かす ・動きをまねる(模倣)	・四つ這い ・歩く ・走る	・前回り、後ろ回り ・横転がり ・這う	・Om走 (距離は学年による)	・水中リトミック ・水中で歩く	・ボール転がし ・的あて	・ジャンプ ・片足立ち
	・いろいろな走り方(前向き、後ろ向き)	・登る、跳ぶ、くぐる	・動物あるき	・O分間走 (時間は学年による)	・顔つけ	・玉入れ	・フォークダンス
	・跳ぶ ・くぐる ・ストレッチ	・またぐ ・的あて	・四つ這い、高這い	・折り返し走	・蹴伸び・バタ足 ・ボール拾い	・キャッチボール ・パス・ドリブル	・止まる、動く ・ストレッチ
	・物を持つ ・物を持つ ・物を持つ	・物を持つ ・物を持つ ・物を持つ	・手押し車	・パトンリレー	・潜る	・シュート	・動きをまねる
	・引く張る ・ロープで手繰り寄せ	・押す、引く ・協力して運ぶ	・またぎ乗り、下り ・バランス	・ジグザグ走 ・障害物走	・浮き具を使って泳ぐ ・背浮き	・ボール体操 ・ボール送り	・音、リズムに合わせて 体を動かす
	・動物をイメージした動き		・平均台わたり		・伏し浮き	・簡易ゲーム	・しゃがむ
扱う 器具・ 道具	・ミニハードル	・低ハードル(44cm)	・マット	・カラーコーン	・たらい	・かご(ボール入れ)	・ボール
	・フープ(大・小)	・平均台	・跳び箱	・コーンバー	・水遊び遊具	・ポウリングビン	・棒
	・くぐり網	・箱	・平均台	・パトン	・浮き具	・的(種やフープ等)	(新聞を丸めた物等)
	・巧技台	・ゴムひも	・鉄棒	・デジタルタイマー	(ヘルパー、ビート板)	・ゴール	・手ぬぐい
	・マット	・縄(長縄、短縄)	・トランポリン	・ミニハードル	・フープ	(バスケット、サッカー)	・タオル
	・ケンステップ	・ラダー	・巧技台	・ハードルゴム	・拾い棒		
・キャスターカー	・重石(ペットボトル等)	・ロイター板(鋸切板)		・ダイブボール			

つかる、顔つけ、背浮き、伏し浮きなど徐々にビート板やフロートなどを使った活動を行っている。高学年になるとこれまでに行ってきた活動を継続したり、補助具(浮き具)を使いながらバタ足をしたり、息継ぎの練習に取り組んだりしている。

E ボール運動系の領域では、低学年で、ボールを転がしたり、投げたり、的あてや玉入れ、ゴールや目標物に向かって蹴るなどの活動を行っている。中学年では、片手や両手でボールを投げたり、簡易なルールに従ってゲーム形式で対戦型のボール投げゲームをしたり、ゴールまで蹴り進めて得点を入れるなどの活動をしている。高学年では、バスケットボールやサッカーなどの簡易なルールの活動に取り組む中でボール運動を行っている。

F 表現運動系の領域では、低学年で、リトミックを年間通じて体育の主活動の前に行ったり、『〇〇体操』としてボールや縄に見立てた手ぬぐいやタオル、新聞を丸めて作った棒を手に持ち、曲に合わせて体操に取り組んだりしている。また、ダンスとして、教師や友達の動きを真似しながら体を動かしたり、フォークダンスを取り入れたりする学校もある。

#### IV. 考察

(1) 知的障害教育における体育科年間指導計画の内容  
各校の年間指導計画は、書式や形式、内容の記載に各校による違いは多少あるものの、一年間の単元構成や単元配列は、各学年や月別で比較してもほぼ同様の傾向を示しており、大差ないことがわかった。

表8に示すように、体育的行事における徒競走と集団種目練習、新体力テストの記録測定は春か秋に配置され、季節で扱う単元としてプールは夏季、持久走が冬季に概ね配置されていた。

扱う運動領域については、学年によって多少多く扱われる運動領域があったものの、学年によって違いが

あると言えるものではなかった。また、扱う保健領域については、うがいや手洗いなど日常生活の指導との関連も多くあり、明記されていない内容が多かった。

単元(題材)と指導内容については、各教科等編解の体育科における「内容の取扱いについての配慮事項」に基づき、学校や地域などで特に行われている遊びや運動などが取り入れられていた。また、同じ学年であっても個々の児童の障害の状態等、遊びや運動の経験及び技能の程度が多様であることを踏まえ、児童が興味や関心をもって取り組める単元(題材)が構成、配列されていた。一方で、各運動領域で扱う単元の特徴からは以下のようなことも分かった。学年が上がることで短距離走では走る距離が長くなる、長距離走では走る時間が長くなる。ボール運動では、基礎・基本的な運動から簡易なルールによるゲームが取り入れられる。水泳指導では、場の設定をより簡易的な水場からプールへ、そして泳法指導に繋がる学習内容のレベルアップなどの特徴が見られた。扱う単元の特徴からは単に学年が上がることで、強度や難易度を増すというのが系統性であると読み取ることができた。

学習評価については、表4に示したように、観点別評価による評価規準が3観点で示されているものが少なく、3観点で示されているものについても各観点の内容が不十分なものがあつた。

6校の年間指導計画の内容からは各学年、月ごとに扱う領域と、活動内容を確認することができた。しかし、知的障害教育における体育科の指導にとりわけ必要な個々の児童の障害の状態等、遊びや運動の経験及び技能の程度が多様であることを踏まえた目標や内容、学習の評価については、調査した年間指導計画から読み取ることができなかった。

(2) 年間指導計画から明らかになった知的障害教育における体育科の課題

表 8 年間指導計画の単元配列の傾向

月	4月	5月	6月	7月	8・9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
単元 (題材) 例	体 集 つ 団 く 行 り 動 運 動	徒 集 競 団 走 種 目 練 習	器 新 械 体 運 カ 動 テ ・ ス 跳 ト び 跳 箱 び 箱)	水 の 中 中 で の 運 運 動 動	ボ ー ル ル 運 運 動 動 (上 上 級) 級)	器 械 運 運 動 動 (鉄 鉄 棒) 棒)	体 跳 つ 躍 く 運 り 動 運 運 動 動	持 持 久 久 走 走	体 サ つ サ く キ り ャ 運 ト 動 運 動 動	ボ ー ル ル 運 運 動 動 (下 下 級) 級)	表 表 現 現 運 運 動 動 ス ス

定型発達児においては発育発達の観点から日頃の教育活動における体育指導の充実が図られてきたが、知的障害児においては、知的部分にとらわれがちで、走・歩行動作をはじめとする身体的側面や体力・運動能力の課題やその向上に向けた対策が充実していたかどうかは検討されなければならないと早川・小林(2014)は述べている。また、知的障害児においても定型発達児と同様に身体的側面や体力・運動能力の向上を日々成し遂げていけるような生活環境・支援体制の整備や適切な指導体制の充実がなされていかなければならないと指摘している。

今回調査した6校の年間指導計画にも本来であれば定型発達児よりも配慮すべき点が多く含まれるべきである。しかし、個々の障害の状態や発育発達による個人差に対応できるものはなく、学年ごと一律に示された目標と内容に過ぎなかった。また、現行の学習指導要領になり各教科の評価について学習状況を分析的に捉える観点別学習状況の評価が一層重視された。これは様々な課題を抱える知的障害児こそより個々の学習状況を捉え、一人一人の学習の成立を促す評価が大切なことから考えても必要である。だが、これもまた年間指導計画に示された目標の設定は曖昧であり、児童の学習内容の改善や、教師の指導の改善に繋がるものではなかった。

野津・片山・石田・齋藤(2021)は、小学校体育科の年間指導計画の特徴とすると、それぞれの学年ごと、月ごとにいくつかの単元名が列記されているだけにとどまっている。また、同じ運動領域の種目をどの学年においても取り扱うというようなことは見えるものの、どの学年で何が追及され、どのように積み重なっているかということが明確ではないと述べている。この2点については、本研究の結果も同様の傾向を示していることが認められた。すなわち、小学校も特別支援学校も同じように学習指導要領に基づいて運用されているが、小学校の教員は小学校学習指導要領体育編の巻末にある「領域別系統表」が示されていることにより、2学年間で指導すべきことが6年間を通して共通理解できる仕組みになっている。それに対して知的障害教育における体育科には「系統表」がなく、指導すべき内容の系統性が示されていないのである。年間指導計画は学年ごと示されているが、同一学年であっても、個人差が大きく、学力や学習状況も異なる児童には、

段階を設けて目標と内容を示し、個々の実態に即して効果的な指導ができるようにしなければならない。単に学年が上がることによって強度や難易度を増すことが系統性を示しているとは言えないのである。つまり、知的障害教育における体育科で系統性を示すためには、教科における目標や内容、各運動領域の系統性をさらに細分化し、個々の障害の状態や発達段階に応じた目標と内容が順序性や系統性に基づいて整理される必要がある。各段階で必要な指導法や指導するための技能、指導におけるポイントが示されていることが前提としてあり、初めて共通理解の上で体育の指導を行うことができるのではないかと考える。

児童の実態が多様さを増す中、体育の学習形態は変わらず学年の集団で行うことになる。同一目標・同一内容で取り組むことが困難な児童に対して、現状の年間指導計画や学習指導要領を基にした授業づくりでは、学習指導や学習評価を行っていく上で課題が多いことが分かった。

体育指導においては専門性を持った教師による教科担任制の推進が小学校で謳われている中、知的障害教育において障害の特性を持った児童への体育指導はさらに困難さが増すものと考えられる。指導の指針となるものがなく、共通理解が図れない状況の下、体育専科の教員が少ない小学部教員の個々の技量に任されている現状では、指導内容の質を担保できる状態にはないと言えるのではないだろうか。

### (3) 知的障害教育の体育科における今後の方向性

今後の知的障害教育の体育科における指導について、体育の指導者の立場から2点提案し、今後その方向性を探っていきたい。

#### ① 教員の困り感を明らかにする

現状、各校の年間指導計画に基づき体育の指導を行っている小学部教員が、授業づくりや体育の授業で抱える困難さについて調査していきたい。須田・菅野(2015)は、子どもの実態把握(つまづき、技術を向上させる)や単元の指導・知識に関する困難が多いことから、これらに関する解決方法を明らかにしていく必要があると述べている。今後調査をすることで、教員が何に困り感を感じているのか、どこにその解決の糸口があるのかを明らかにしていく必要がある。

#### ② 年間指導計画と補助資料の充実を図る

現状、授業づくりや体育の指導を行うために教員が

拠り所としているのが、調査でも取り上げた年間指導計画と、学習指導要領の2つである。しかしながら、年間指導計画から知的障害教育における体育科の指導に必要な情報は得られるものが乏しい状況にあることが分かった。

したがって、知的障害教育における体育の指導を充実させていくためには、具体化された基本的構成要素を含んだ年間指導計画と、学習指導要領に加え、その内容を補充・補足してくれる補助資料を作っていく必要があるだろう。

年間指導計画には、構成要素となる単元名、単元(題材)目標、各単元における主な学習活動、指導事項の有無、活動時期、予定される時数、活動場所などの基本的項目を具体的に示した上で、児童の個々の障害の状態や発育発達の状態にあった目標や内容を確認するために補助資料と併せて活用できるようにしなければならない。「障害のある子供一人一人の教育的ニーズに対応した適切な指導や必要な支援」の必要性が現行の学習指導要領で求められている中、現状の年間指導計画だけではカリキュラム・マネジメントの実現には事足りないのである。発達段階のまとまりに基づく指導内容の体系化を踏まえ、小学校学習指導要領体育編の巻末にある「領域別系統表」に似た形で、知的障害教育で学ぶ児童の特性や発達段階を踏まえた「知的障害教育における領域別系統表」が必要であると考えられる。

「知的障害教育における領域別系統表」は、文部科学省(2018)の「特別支援学校の各教科等の基本的な考え方」に示された、各段階の目標と内容を基に、児童の障害の状態や発達段階を踏まえた系統性を整理し、細分化して構成されなければならない。細分化とは、勝二(2012)が述べているように、学齢期であっても基本運動が未獲得な者が多い知的障害児において、幼児期に獲得される基本運動スキルを習得するための支援方法を策定する必要があるだろうと指摘している。系統表と併せて基本運動についての発達順序が示された表を用いることで、次の段階の支援の道筋を示すものとして有用なものになると思われる。

このように具体化された基本的構成要素を含んだ年間指導計画と補助資料の2つを整理して示すことで、学習内容や指導の改善にもつながり、カリキュラム・マネジメントを実現可能にする教科カリキュラムとしての年間指導計画になるものと考えられる。

#### (4) 今後の課題

今回は、6校の知的障害特別支援学校の調査であり、しかも県内に留まったものであった。今後その現状を把握していくためには、広く調査をしていく必要がある。また、今回は年間指導計画の調査だったが、今後は知的障害のある児童の学習指導にあたる教員の困り感や系統性の理解状況などをさらに明らかにしていく必要があるだろう。今後併せて調査を進めていくと

もに、考察で必要性を述べた年間指導計画や補助資料の作成に着手していきたい。

#### 謝辞

本研究にあたり、資料を御提供いただくなど多大なる御協力いただきました、静岡県知的障害特別支援学校、及び知的併設の特別支援学校6校の先生方各位に対しまして心より感謝申し上げます。

#### <文献>

- 阿部敬信(2022) 知的障害教育における「学びの連続性」を踏まえた現状と今後の課題. 九州産業大学人間科学会, 4, 19-21.
- 国立特別支援教育総合研究所(2015) 「知的障害教育における組織的・体系的な学習評価の推進を促す方策に関する研究」. 特教研 B-295, 247.
- 勝二博亮(2012) 幼児期における基本運動の発達段階—知的障害児のためのアセスメント法の開発—. 発達研究, 26, 63-72.
- 白旗和也(2012) これだけは知っておきたい「体育」の基本. 東洋館出版社, 32-33.
- 須田桂子・菅野和恵(2015) 特別支援学校(知的障害) 小学部教師の体育授業における困難さの検討—小学部教師を対象に行った調査から—. 障害科学研究, 39, 53-64.
- 野津一浩・片山径介・石田達一郎・齋藤剛(2021) 保健体育科における教科カリキュラムの編成に関する研究: 年間指導計画の問題点の検討及びカリキュラム編成の考え方の提示. 静岡大学教育実践総合センター紀要, 31, 198-207.
- 早川公康・小林寛道(2014) 知的障害児の発達期における運動能力について. 人間生活文化研究, 24, 78-95.
- 三浦光哉・山口純枝・小倉靖範(2022) 特別支援学校が目指すカリキュラム・マネジメント~参画チェックリストと7つの要素を動かす15の仕掛け~. ジェアース教育新社, 8-9, 18-20.
- 李子耕一・家田重晴, 勝亦紘一(2020) 改訂 新しい体育の授業づくり. 大日本図書株式会社, 158-159.
- 文部科学省(2016) 学習指導要領等の理念の実現に向けて必要な支援方策等  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364306.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364306.htm) (最終閲覧日 2023年1月4日)
- 文部科学省(2018) 特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編 小中学部. 開隆堂, 23-25, 225-226, 246, 600.
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター(2020) 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校 体育. 東洋館出版社, 4-6.